十論為辯私始

へ5
2235
1

2293
巻 1-3

藤野潔 氏遺愛之記

明治四十年四月二十四日
藤野潔 氏寄贈

爲辨抄

十論大綱

蓮二房

今爲辨於一運二ヶ講述の辨ふて儒書一圓宗の二用とあつらひ仰折と蓋悉の一理とはちくはちるとを他流の依談事を詔よう儒師のるるとをやつけて尼入るの事ふも世尼をれよの和節ふるひ文尼をれよの風雅とふるふ一論ふもやそて一名と流派の論語ともそりはちをつて十論ふを對向の詞の端的ふるて和漢ふ上代の意とおふて以名と流派の急綾ふいい連俗ふ

風俗の強果とゝもに我家の白馬孫
文章訓ゝいふ教誡訓ゝいふ両様の家訓ありて
知を世にゝ風雅ありといひ教ゝ人にゝ勧懲あり
とゝろにゝれゝ文のゝそゝへゝゝゝゝ論説の
一貫ねゝゝ文後おのおのむゝとありて両訓ゝ
文教のゝ差おと辨ゝゝ儒書に現在ゝゝゝゝゝ
殺盗婬妄の教誡ゝゝゝ儒教ゝゝゝゝゝ
のゝ文後あれゝ家ゝゝ走ゝはのゝゝゝゝゝ
此當用ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
教誡ゝゝ実ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世上ゝ今日の風俗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝに明ゝの国家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文章ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文章ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

廛とにらみけん一字一言もれて其高過於大学そうんをれよも合点ゐて可及其智不可及其愚そをはらい世代の要よをそてそ智やようんそ愚やようんそ言行の始末のうちよ倫いてい有用の実化をかそそ無用の廛の設やそそことも儒にてい所といふ仲家うへ二ゐ便としいふ所以ゐよ有用と無用との間をそ要人君よも建立のことゐよう道うゐ利の用あうて尋竟を金銀のごとあれよ要者を無用の用にあそ愚者ゐ有用の用にくーむこれよの智愚ともうへ世代廛室の事ともうて有用よ無用を世高世の

認ちうとをんをもや儒道の処うとけるかの一生人うかこれくく天をまた断文ゐそ死ことさむ一言うて孔子に一生の骨ちうと教誡と先うて不道をた極のうへ廛室の文ゐうへ周公道布ゐ文王のくーめうる道ゐうへ周公とをうて最期の詞ゐ文王とをうへ宗廟とをんを迫てきおやせ調うをあそ伊儒を決して断文の先ちうと

ふほうれんそう施教也先王之以詩書道仁義之說之以詩書而導之以孝悌仁義之說諸人之所以安其心而樂其業者詩書之傳尚矣而儒者之徒不能深究其旨趣而愈明者學也

ここに於て不幸の三字と論語の大
い助語にありてこれらの文章の優美を添ふと
それと風雅の語を載しいひ返をくりかへ
へさらて論語に於るの古風ありんさま
ー牛の風諭のさまく子路一斉孔の訓諭の
ささき牛のおうて論語も勢のちりさる文章の風雅
い余ありて論語も伯文の教訓ばかりにて
勇まちる子思よりか子路よりも重きの称ありて
孫にれるのおうさを失ふ風雅の中も例借の字有へ
論語一部と鑑として才一に世代の和節とする
一知テ和而和ニシテ不ニ以テ礼ヲ節ス之ヲ可行ヲ也ト才二
文はの温厚とさる一即之ヲ也温ニ聴ク其言ヲ也

厲そよ和節と温厚を記諫の語を挙て例
い證拠の事懐ありて滑稽皆の一たるの言語
論後の叫ぶ声とありて今日の言語論後よあ
一言語い人間の文飾ありちるを儒学者の称
かうして下学上達の論語と失てれなの調の
表裏とちるも教誡の実を表してそ文章
の重と裏にちるさるも七十二弟の学者もれなの
れ子の推量とくちりるへ顔回ひとりるとちる
思也虚空とし虚実の二用をおはりて経日孔遅も
違ハさるや言語の例もをつくるも幾言とて

孔子のきこえいや何ぞの空の解空の称名
い仏家の者子ぞんん仏ぞ万代の道順そこ
一孔の塵実とそれていも
おね不覚の哀憐そて天衰ぞく
不顕ニ於斯文一そそ斯文のみぞまて仏そ
のみぞんその顔回さへ能信而不能ス
の仙ひと乳たられてや
のひ孟子もれ子の実と仏
るられも文孝の塵と仏
仏ぞおこて舜の浅井貫父のまれれよの
惑似而非ちら白とい
達そ塵実のおはも

仰書も傳書の是し仏ろ若ち傳ろも仰ろの
ねしちうきいそふり仏ろ推化といいそい推要
といひ巴二葉し微笑の家ろ附あれ曽笑し一以の
秘仏あり端末う辨舌ろ同連の非通うもはそう
言優ろ学文も阿難の説法ろ反ろて須善提の
戒行も阿き寡の徒りも論もれい優劣もなく
論説の教も標厳の識もおりもの法まもあり
て仰代のそ仏とをろ学ろ実学すく
とれろの詞とねしをそ程ろめそ、北と仰家れ
いれやもとやちそ二程のんよられて塵実の用
とをろ一まそいあれしはほりふ
他以実の一字あれん廉とおお者いふとろておる

ふそ我軌の実あるん中ろ傳はろ二在のれまき
ありこよの威儀ありて仰者の律法まろ仏ろん
はおとぬろ文と教とに何ろて論説を生ろ
とや最意をそて塵実の空ちいやそ
仏法の宗旨ろ家を得て酔ふくそ公の仏教
いせ代の用ろそとおそろい五倫とやろん
はるそれ不おの坊ろ元ろ釈迦の真假とろろる
夜に今の儒代を実学すろ世代の妻で仏ろ
きかろ一はるそ叶ん雅の法者達ろれよの塵実
とをろそる有に今の老家い世界をたけるて塵
無し今日のれと失一ろはろて書物の瞻実をも
ろいそ老よの道徒とそろそる教ろこ道の教

十論為辨抄

序段

茶話禅　僧書也　相看而武仏
の仰項和尚之冬　て授子一碗の茶也　話則と
守て仏諸のこころ　いと悦のこ　ら言依に
虚空の妻とあれる　ら　波子　庵の同答
ら通昭と小町ら言　とあるて　之所東老仍
のごと辞あり　くら　神家の對向と　て
仏諸の宗の授妻と　そり　令新二巻あり
文　教　仏一對へ十論の　元例あり　処へ論語の述而
ら效あるへ十論を　と　妻て祖宗の遺訓あれ

渡部和編

とくものてこ道の非とあくことわ仏孔と妻ら唱へ
の論へ之一なり我門の仏諸師い儒ら仰ら
られるより釈迦孔子の非とてそして言説の依処
ら酔迷つむとも孔子の名同八用の喩ま　てこと妻ら
賢典とてふとも古風ら宗下の向とたくろうとおりく
い助言とふ会ら　ともこ　玄のよ歳とやくこら主
まねの儒名も仰名も　ねけ十論と依処　て仏諸
に遊のこ例ら我物の妻とそ　て刘辰妻ら仰のこくく
仏諸い鄙気云く歌の違ら　ら上ふ之庵ら　ろる
会ないら　醋いら　ふいあり　と、利好の指物ら　て釈迦
孔子の言仰とたくる　へろ　として仏諸ふ　ら言諸のあり
ふ　ら十論を世代の名用とまる　へ

一ずつも論者の作と
ㇾ擬ふやうに我らは
誹諧の名匠とても
ちゃうどそれに
竹箭と磻矰とも
の微中みて手曲と
を妙冬扇
後動ㇾ王充論衡云作ㇾ益之能納ㇾ愚補
矯人
人和ㇾ

俳諧も例の淡笑より五倫の訓練とならん
ㇾ受ㇾ意ㇾ名ㇾ
梓行 洲汰 此版を
扱行ㇾ祖意の滅ㇾ
行ㇾ祖意の一ㇾ
山序ㇾ祖意の萬字
ㇾ立ㇾ世ㇾ
い字一版ㇾ
過當 遺稿所説ㇾ過當の二字いと
ㇾ天道の報然不動とㇾ大道廢有
仁義とㇾ動ㇾ人の
れㇾ詞の厨の胆ㇾ

天道贊　史記滑稽傳曰六藝之於治一也
禮以節人樂以發和書以道事詩以達意
易以神和春秋以道義太史公贊曰天道
恢々豈不大哉談言微中亦可以解紛
秦優旃贊曰善言笑言合大道往往時
談笑訓諫　白馬教誡訓諫の二字
をとりて仏語の贊とせしもおもしろき
いささか文とあるとやりけむに笑ひて
筆一面とせしかど人の悪とあるさへやいな

これらも況の向面とやもりの有て儒有れまを
なりまれらし言語の実をとりのどり喧嘩と序
と失よりも見くかやうの調ととやうれ言の係と
〈急絵のさらいならて意と急
調と〉かともく礼勧懲の用ありてれ門の文ひい
人とともちもて美悪のんとて美の端とひひ
左家のさよ格と人とくくをに美の衡を
通往の言とくをれくに文章のことばとて
連俚の美ともねあくんと和て言語の訳とやい
急詞もて家の用あれ絵調もそその用あり
儒師の言美とあれまる尋意言語の叶有
とるへしとす論一記ら。そるや

訓諫のたぐひなれど訣矣一和の節の要
ありてをもてとくへ勧懲をもしれ悪の人あり儒仰
て信ずべきをもて一たびは訓諫あれど大悪の人あること今も昔も
の訓諫あれど五美中にも訓諫ありて世々の一道
れまた五美中にも訓諫ありて世々の一道
と違をもしてしかも七十余国七雄の人々倫も常
も分りてあるもの限あるこれまり
兵非斯人之徒而誰與とうの大夫のこと也
とよく嘆ぜしかば才と政の我とをる時の
一對こゝをもて一五美諫い解こゝり

滑稽　史記評林に崔浩が云滑者亂也流酒器也
轉注吐河終日不已言出口成章詞不窮竭也

雜云史記滑稽者皆博辯之人
應變不窮之士詼笑之後必有
合於大道譏刺之中頗寓勸懲
之意或一般揶揄之要旨達意
微中解紛於談笑之間動破
人之迷惑而賢詞巧辯
不必近於東方朔之流
俳諧 史記索隱云滑稽猶
俳諧也雜云俳諧
ハイカイ
の二字古人漫書
ちりと古今集よりはじまりて
品題とあるより別して俳諧
ハイカイ
の一体ありて

の俳諧とて各おのおのはちりうやけ頃の式目ありて
ふ誹諧ハイカイ
ふ俳の音あるにや
ふ史記のかな文を反くへきなれど人の屈馬
ふ安りて俗ぞくの字を名に
と人の篇のはたい十論一部の大口訣とする一一
にて物よ庵の遺稿、夜話よ俳諧の二字と浮ぶる
とて史記の諧林の虞詼の夜話の略文
ちうて滑稽傳いれ九段して之段へ司馬遷
幸書あり六段を指すに孫ら附録ありて
俳諧の訓讀をなるに或ては
浮あり刘辰翁云滑稽者全テ鄙褻ナリ
従ひ之藝ニ在詔ニ来ル此即太史公滑稽也筆ナリ

云滑稽而巧ク六藝ニ通ス語文意又不相届恐クハ
有誤ラン今ハ姑ク諸ヲ其ノ儘ニ存ス六藝云ノ如キモ
面クノ意柱ニ掛在ス六藝云ノ如キモ
モ又ヤヲ小六藝云ノ用トスル所ノ
天下ノ通称ニテ儒ノミ連ル世ノ能ト
モ射御ト書数トノミニテモ無ク
モ事ヲ云ヒテ其ノ六藝ニ通ルモ有ルヲ云ヒ
或ヲモ況ヲ云ヒテ其ノ事ニ於テ
ある一ヲ兼テ万能ニ云ヒ況ヲ云ヒ
と重ネ知ルヘシ其ノ事トスル所ノ業トシ
ルヲ其ノ軍ニ用有ルヲ云ヒ
れよリ乃チ如ノ取ルヘキ所ノ

射御モ書数モ凡雅ノ
又ヲ野ニシテ孔門ノ弟子云々ヲ云ヒ
行ヒヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
中ニ小ノ下ニ一通ト云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
也下学ヨリ今ノ凡用ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
二学ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
六藝ノ如キニ於テ
扨下ヨリ上ニ達スル例ヲ以テ諸ノ弟子ニ
ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ
遊言語 白虎大綱ニ諸ノ対向ヲ云ヒ況ヲ論語ノ下学上達ノ

い言説と字そして世代とやくくる通ふくれ行
くは我の一ことを一字我子貢と祖述こと對曰
て儒佛老のこ字論語の二字に言行の二ことをおよそ
けるよ論語ふこ字は古聖賢の事をひろもる他
いふそして五ふおこもあひて言ふ行ふそ天地の己開もりふこをふくそる
ほそそそ何よう我貢と祖といふ政ふいふ此
の入用ふて文字よそ通の化精もこれ私述
のれよのそこ男のふ人一信をれてを捨を弟に
ほしのふい何難述ふ無いこと言とひろもよ游子
貢いも説とふこてをれと佛老ふい儒書と

いふ儒書ふくれよくのてよと表して言説の旨仁
之文世歌樂を旨仁之和也とそうをやを言説の
大切ふる道に自能の用ふて性とおこふや
先ふれふ道をひろ言説の似而非ふうよ人のふをる事人を
ひいこふおふとる佛人をつふ言説いもふ
七性の妻ふたうて要ふも万物の靈をひいさ
佛を一万の実ふそこもる俗談ふなふの言法を
あつふ地ふれふ一歩ふ里のそういとおもる一
再問云ふうふ孟子の尽心一論語の行簡と和
行ふて子張曰執政ふ大志の
今ふひう俗談ふをれふの行簡と佛ふや再對二

云なれも黄白のそうにん論説と打揃へて
ここまで仏法有あらてハ
ゑやす張面目斯ものやうに
もろおうて俗諦と俗諦の
きらいに訊諫のにあ
ゑなる伊尹、
孰弁第二
自在のへ
のゑうそやいうむ
もうて智仁勇のことを
そこをよあるよとてよ言説の
もきくとうへ儒門のゑうそうくとも

あそいうそうよへあるめしなれを言語にもぶれ
ゑうくとてよやれよそれおの對向に言説の
優遊自在とそる一
俗諦の祖とにくちむ
燈灯俳に打つうれ
のよ学ゑをそそこ
のよ言説にあそふとそ
論説のえ子しこれそ
一ケ危行言孫
みて長の経訊諫と
いいもうて訊諫の言説とそのよくそ山時老人
の遺訓よもそれまとれ雅のを祖そ人

禹湯文武　遺稿を考へ孔孟の作述を下に周公をや連ね叙べ仰ぎ
仰ぎてこれを上に帝堯の盛徳を称へ祖考の名を削あり之卿の
陳ありて或を考へ或を考へ或を考へ
むることを得ざるやは其の後動
過當とをくらむ
あるやは詳のみを後
詩書を以て孟論一儒仰の建立と
の自在ありと称
則の遺稿
一貫
そ
の異端とせ
虚実の二代
て倫の大略
訳
多用の

儒仏をとやくて未来一権景の仰ぎと信ずる
い滅ねと内人の説ちと
九二の命一正をもて
答の虚実自在
加へて異端とい攻
かさけてそのもちを孟
朱程のおのをそれ
をれそれの豊遺書一
言あり史記を司馬
左のごとやら異端
やらをれくら
も仰ぐ世界の人の

を称うるかごとき乗列揚雲を汚して言ふことなけれ
1好むものにあらずして妻子と奪をともにうるさくて盃をと
るの塵をたいくつするにあらざるなり言語の妙なるを
もて舞と鼓筒とを負せうに飢饉の年の新
毛食と例して一本のなしとこれをも下戸の招を
嘲るやそれの海濱う天下のまことにして訳とも
きそのことをおもんぱかれる論語に掌我をもやくる
井仁の答へもまうへつことをみそや好むの人と
そうして「ヨッ奴」うちくらう言とでうちうるよ盃よの
公孫丑よむうれて知言の自讃しんもの歟迦
いとよ筆をおう〳〵念仏論捨の実と説のへた
雖广の達广のを祝ふとかつて不浄

のかくありうことを例の塵をもて実となしたる
報恩を異端とそしりせものみことを事代の
諫うして歌と陸方とをる合点もうれいて
のへくを表むきの実と実とかうれて侍る
も肩衣をとれいを論語よ和節のみ用い
それと和うついいつれと節しいもをれうや論語
ぐことは論語うをもてかんうを誠よ俗諧い塵
実の塵うて居て天竺の儒者仏者とも
我多の汚うて居て連うを仏とくの汚作梨園の文化
の花実をそそあへ醋吸のこをの一座とやり
て酒盛の拍子に歌をもとをれと於笑の
称代うて娘の一字よ山一對ようるへ

猿田彦　神代巻ニ先駆者還テ白ス有リ一神居リ天八達之衢ニ且八竟七尺北目長七尺餘眼如八咫鏡而赫然ト似赤酸漿而ニ云々按ニ猿田彦天孫ヲ迎奉リ給フ等ヲ白孫ノ出給フ時ニ先ノ導キヲ仕奉ルノ意ニテ猿田ト云ヒ名ヲ負ヒ給フ事ト云ヒ其ノ形ノ恐ロシキヲ云ヒ又ソノ鼻ノ長キヲ云ヒ強ヒテ強ヒカケテ云ヒ給フ事ハ俳諧ノ系統ノ訓諫ナレバ云フ迄モ無ク風雅ノ俳優ト云ヒ給フ事ハ誹諧ノ才二論ノ神農ノ黄帝ノ下ニ云々ヘル

風雅俳優　齋部宿禰廣成ノ古語拾遺ニ天照太神神嘗怒ニ坐テ入手天石窟ニ閉籠リ給フ時ニ榊ヲ庭燎ヲ巧ニ作リ俳優ヲ相與ニ歌舞ヲ為ル云々榊ニ仕ル俳優ノ二字ハ漢書ニモ俳諧雑戯セリ

ヲ云ヒ給フ事ト同ジキモノニハ云ヒ給フ大和ノ風雅ヲ云ヒ給フ齋部ノ詞ヲ訳文ニテ俳優ト神樂ノ事ヲ云ヒ給フ風雅ヲ和ヲ人間ノ式ニ云ヒ給フ事ハ和ヲ人間ノ式ニ云ヒ給フ事ト同ジ

八雲　素盞嗚尊ノ御歌ニ八雲立ツ出雲八重垣妻籠ニ八重垣作ルソノ八重垣ヲ詞ニ云ヒ給フ事ハ王仁ノ歌ニ難波津ノ歌ヲ詞ニ云ヒ給フ事ト同ジ

いひ後章〳〵虚字と文章の起結と辨ま
法式新旧 梅ところにだけ一段を言ふ篇と人の篇と
おいて新旧の表はとをけて法式の表ところ
ありとをくく段重の陽秋ろやいそもろい
今のち論ま世の機縁をとろうて例ふ印象の附
あくく真字式と撰(えら)て(まきるやこれく)辨名
の一大ちけて聴(ゆる)も自(おのづ)無容(なだ)則通ふ入とあ
のこれ一家話ま伯韋う辨和作(つくる)や式の新旧
へことに実ちて(まきく)
檀林額 仁ま八百韻に対ま檀林の本
ゆり梅の花とふ字因の着句ち檀林の名い
世ま仰(あふ)へ一ち或ま華蹈はしむう(まきく)

ぬこ今ろう或ま花をぬもて(まきく)
ろの新ちふおもはれ真地ち字因の
比ま(まきく)ま所今ま(まきく)
今く連ま句にかくれ一句(くく)誹言の論あり
新ま字因ま着句にかくれ詞の根ち
のこにて意ま学ふあるれをれを勢(いきほひ)
とも檀林ま新(あらた)とて風(ふう)ま(まきく)
ばれこま風(ふう)ま(まきく)
ろへ今ち五十年の(まきく)
もろ人ふも句一(ひとつ)井ふのち新ま書射(いる)古風の歌に
連(つら)ひれろこまよ(まきく)
詰の型句とにかくむとまほて文章の妻化と

論をこゝの並の小さき浄面のことまでも相伝の
誡としてあるまでなり。こゝに在原の特論としておそ
それをも在世の授記としてれよし他の仏而非
ちのそゝり深くあてこゝ新作ゝ

唐虞、先　此こゝまでの文の字對と辨を一一言に
そゝろのそゝあといわく義農のそゝろ一まと
そゝてあるまでの大極を極をぬくそゝ唐虞
の国そゝて永閇林を擬し對一ゝる剛の喜と砂ゝ
とも深おとゝめをとゝ一ゝる文章のとゝて信を
毎一十編の文北喜絶ゝるを毎ゝ山剛ゝ知きこ
誹諧不知　辨をゝる文ゝ論者と喜山剛ゝ知きこ
こゝて二句の差ておまほよ

へ一なそゝく八雲御奥儀ゝる公任卿は信しは別
のゝゆゝあゝをゝ一ゝて信式をこゝをみゝて
古人とゝきこゝる心ゝれゝ一連哥の家ゝ
ゝゝゝて言葉篇の誹諧いまゝれゝ論をゝて今ゝ
人篇の俳諧あゝいまゝて風雅も式も皆ゝふゆあれゝて一ゝ
當のさゞゝてたゝ一ゝ過
と誹林ゝる諧語滑利とゝい文章取ゝる能ゝる
自在ゝそゝり叶ゝ新作ゝ洛の双林寺ゝて假名の碑銘
ありてこ十二句に七字の謎文ゝり謎の解方
い内陣の秘軸ゝる一ゝ但石碑ゝ謎文のゝ
ゝ漢字ゝの北代ゝ一ゝ

傳曰

一道一字録の儒佛を兼むるより儒教をの
ミ道として人間とこちらく大なる釈迦
とも盧安の二ろをあらてをよの道とを守
かゝるもの名もあり称てね一善悪の道あれハこそ
勧善懲悪のをしへもやまて名のみもを
もも道のをこなふあもて名ハ名にかゝ
へきに名にかゝるをしらす寂然不動のそなへ
それを人間世のをこなふ用にあまてをよへけと養ふ
けるをこれの人をもとりまかなひ世さまに
れ人者ゝめ生のはさまをよもとりかなひ
これらとをよもとりかなひ釈門の

そもをこなふをこれ儒佛をねあいて今日のす
とをこなふへをもをこなふへをはらく佛をとはをもてめの
やもるいををみてをこなふをんむ一南宋の孝宗帝の叡慮
とかれをこなふをんむ一南宋の孝宗帝の叡慮
経テを養生ノ儒治世ノとや御門さへかくこそ
達ーてをのこ用とをもをもをこなふをに儒者ハ佛教
とをもをもをこなふをに儒者ハ佛教
ーてをれる舜大之味をこ佛ふ人連音
佛語の盧とねくするも佛語ー連音の実を
あさむをるもれよに一貫の道とをもをし歌迎
ー一切のをとをもをさるまをとを人間の我執と

ていうて称名の念仏を勧めるのを通例とする儒仏神の孔子を祭るのを儒神祭孔子と称するようなもの神とは地祇の神明あるいは感応霊験のあるをいうと天下の鎮石（しずめいし）と云う一両部とも信家の河伯（かわのかみ）として詭異の場の霊詞ふれ例の霊端と攻るに及ぶてそれ誠やや論い儒仏の二用ちう迂く老教の方ものと云う近く称名のそれのとちがいて要を説のみ地よりして自在の妙あるをもて古代と

故實　仰従（おおせにしたがう）古代（いにしえ）と要を説の捉えいい例と

国家の效とそい故実とのみをとりてみてとるのそいうて実のうえ解やすと云うに安居厳飾の大瑠璃の味のすぐれて古人の錯をもつて古人の錯をもちゐるやうなり

伊賀、素生　白馬抔の負外よりまた伊賀の城を堅守と示にたくて稚名金作ていうて伊賀一四姓ありて抔地営業の中に松尾芭蕉のねい抔姓のひくきよう抔者ともそうなりやそのに家名とそ

さるのいひつたんナ九の年に官とともに洛陽
に移すと仰そ下て武陵に其の南流雪をとり人
ともり常川の吉甘庵に旧通あるもかさね
の年あるとはし詳ふ理まんの中書へ雑はの
遺状に配合あり予二般の老後のてまふる
天禄一通　むうふり儒仰の大通は釈そる遍主
の七仰と仰とれよへ秋在ナ七人の仰あり尚祝
へもそに屋宝の企あんぶやれよの壷を受
うて宝に周公とまてくいのふうと学ぶ然
の他受用ふり百世王通の大からくふり
ぬれ一道の祖ともう人と智性いこ仰と向き
れ〳〵然灯仰の授記ありといい霧ナ老彦

此ととうるを宗くの俗人あり山谷
今の他諧もそそを老柱のえもう仰ありも
へ史記と沖文うて言倫と人倫とにいて新
旧の式とうちる論の一ナナ論を勘ふ
凡雅無私　接もんれ仰
ぬくうりナ論をすり犯ナ古人をもきて称家
と走むとうへはもも
好悪へ例の五仰くもも
古凡もうきるの仰文とも言ナ新旧の差
おと信ててへとうる信の一ナの大騒もつる今
貞享式の用てて宝あるへーえ〳〵や通の人る
あうして雑者の眼と着へきも

第二段

凡雅、道理　按ずるに孔子の差下の白馬
のむれ、そこ迄よのつねの天命の理、仏語の家此者ぬくをもく
道のおこる所を云ひけれども性のうるおとをきりけれ
ども性のうるおひ迄あるをいひ
性の論をきゝあやまりて雑をいまさ
ざるにまぎるゝの理をふかくたづねあきら
めざる時をもあるとゝをきゝ
あるおそれをとよめるなり

心の天遊　荘子、逍遥遊に希逸の賛詞あり、遊者
心有天遊といへる天遊といひ、叡然不動
のさまをいへれども仁義礼智非也、もとより論
のかぎりにあらず、儒仏の表裏をもきらひ去
そこんをとゝきりてこゝ道の筒のさまをいへる
先後の衆　先後初の大略に我家の者ぬい記の文

釈迦れよと拵向ふ言語の重をかへ一
のなくなをと一道建立の大おやうちも也
生後の子よう教家の帝後うて地の好悪を
山訳よる為し
條法白馬寺道訓と論語の和節とを抄して
二條の此のにほあらうも訓の書文に出て世俗の人
和とて他情て歎よ出てしかして老子
尊号を為てとも財の言語よあるのを
附の塵実に自在あれも毛次ったうことを
史記の談実と家ばして言語の用不用とそれ
毛次よ此ふして旧新を信有のやうれ
いそとふ猛ね書方土の家うも茶人のそいと宝る

うことをくこう馬のくんとやてるまとやさうにおう
ましにちくうまくさくさくもも雅俗のさういうりてく人
のんだをものうさをもうれてもり出さと俗家の法
あうあさ面のの話のおうくさうれてさうとをしうれくまあるも
雅りのさんやちるさいて文をけの力味とくいひ
それと巧言今色とつよ具れを手家抱て頼政
武士とけい鳥呼(ヲコ)とつて武士の態(アル)と活をしの和言の
の号の袋(アル)と活てしまあるまに仁者必有勇(ニシテ)とる
答指とさくなのこさあるまに仁者必有勇(ニシテ)とる
文武のこととももさくなくさうふ行ものの力の業
るもくくにちやは雅と文章のおうて文者
貫道之器ちるとせ1俳諧とをしまくの我てし

酔をさくへかれんとおうてそもちくん和節を例のいうてのの巨人
やう活ちるをを論語の和節を例のおうこさあるもやこさ活の
作文さうをを論語の和節を例のおうこさあるもやこさ活の
まあるれちるさもも子路とおやしおの優游にて
おうさもをれるの對向をはおの優游にて
ちるをもさをを支よの訓練あるちくん中近く論語の
俳諧ちるともくく近く俳諧の論語ちるとまる
史記と劉董の二号さうことくさもも俳俳をて
おくんも嘆なる酔仕とをしまくん嘆のて
そ毒をはくさもも人と俳諧のこと地とちるくてやや
さおし誠さ今子こはと俳俳をおのこと味と取合せ

時を詩のいつわり論ぜし古人 然詞を尊
俳諧
い奥羽よりかへりて高
奥羽よりかへりて高
なれ共のがるゝ世界
大極の一気より皇
の尊人
と道の本歌として
工商の義
相
るとなりの俳諧
そもそも

て世よりの名用
は行てそを建立
世情
おくそゝを
まるゝはんぱ
なり俳人
とそゝ
かゝわるをいつわ
も自化の文
をやまるを尊人
そもありて詞
ふれいを始の意
世情尊 按そもそも俳諧一様の
おくそゝを歌頌の説にて俳諧の空相と
まるゝはんぱなり俳人の俳諧と云ふ
なり俳人とも盧とそれを射の教頌
とそゝ人の機嫌とよくはうかゝ
かゝわるをいつわ笑もちそこ俳諧の実を
も自化の文の一大こゝろいれ記も和の一字も
をやまるを尊人の眼力より相似の法也論
そもありて詞諫とおれ雑説
ふれいを始の意まるおとそもそも世情の尊

の事語りとして俳諧之詞ともなりもろ
誠に宗祇宗長などの集載紹巴の連歌にても
も耳おおわしにはきこえて尾も入るる
い例の事語りて俳諧あれど一さて一再にはて
二さて一再きこえてきこえて畢竟もおもの面も
実なるべく消もこえるとは梅とはれけれの風言ふる
これんちゃうとのをくのあるとや恥へきそ人の
ふかうして婦人の面ばらうや
○不遠波　助辞要ノ序ニ云助字ノ者詞急緩而可ン
知ニ物ノ之差別一ルヲ其ニ言語ノ音韻ノ二ツ
情愛もそる異もそるへきれん急緩ノ音のあるひ

うて雅俗ノ韻のひくまことて一合梅もそに
西りのそに心人て花さきそやそきのやれ
いさそうそうこうてその雅言けいてくあそる
ふんにいそうそうこうてその雅言けいてくあそる
心の実をなくそれ一合梅もそに
て西行一代二首の接おといいそもの一さも
詞とかそうもおく俳諧ありて富士のそれ
ひふひくもありの作そうそうあそうそり杜子美
い熊手ふ物とおて春水綾深とも野航悟受ク
とし縵侵堤柳ともし縵搓テ浪花とも星低ク
とい月涌テとそるこれそのの物語い向こと
ありて語不驚人死不休ヤとそうきる風雅の

精神と云ふ事を
て感仰する
二を盡さゞるの
くある時を
ひとりも笑ふ
哀怒し訓諫も
名人場 遺稿在話
可き事を
ゐるくの有用
いつもそへ
ときく所謂
おゐて
藩と云やう

と云例と言語の盡さゞる
十知一大 十知の二
先後ありて
○子謂子貢曰
也何敢望回
聞一以知十
知也

今按此章
吾與汝弗
人之向而可
以與之字令
共也或說尒
點吾與女弗

一ゝ誌ふ事
論語公冶長
ゝ
回也孰愈對曰賜也
聞一以知二賜也
如也吾與女弗
子貢方人之惡史所
徵子貢之方人之惡實耶彼所責
案夫子之盡實
不暇之對也
詰抑尒者
許可之矣止乎
與者同也
尒者點吾與女弗
而所謂
了

子貢ノ詞也了ㇾ立ㇾ在有ㇾ温而勧善也則責ㇾ之ㇾ
我子貢ノ時ハ有ㇾ厲而懲悪也要論語者知ㇾ此等
之機変而知ㇾ其時之七十二弟子ノ則可ㇾ知ㇾ其
日之孔子ノ皇帝ニ矣然ハ聞而所ㇾ知有ㇾ上智ㇾ有ㇾ聞ㇾ一
而知ㇾ二了則十ㇾ庶可ㇾ知ㇾ万ㇾ従ㇾ本万法之一
理也則一ㇾ聞而知ㇾ一了則亳ハ有ㇾ黒ㇾ本
驚ハ有ㇾ白ㇾ止争知ㇾ時宜之妙ㇾ要ハ有則論語
之二與ㇾ十ハ有ㇾ條ㇾ直ㇾ子貢之方人之辯ㇾ迚智恵ニ
立ㇾ八段之違ㇾ而令ㇾ感ニ子貢ノ止有ㇾ必定也
儒仏ノ内證ㇾ梅ㇾ檀ㇾ論ㇾ論有ㇾ辞実
あんばらくるの奥慶と空ニ釈如来の道ㇾ
阿雖ㇾ為ㇾ如ㇾ是ㇾ章ㇾ論ㇾ論有ㇾ辞実

水災の要ある等を説くも亦佛の
まほとけと減ずるの次第あり
とをくーー今の眞言宗の性面也
頓漸　四教儀に頓漸秘密不定の四教を佛教
の上に次第するも亦佛教に漸の二教を
一一要とし佛とは菩薩との間(こゝろ)にやうやうをおいて
ちをおくるえ品の妙なるをおきて
の判者の下にを見ざる一一
花厳自在　佛説と花厳を実とし華厳(ケゴン)を虚
の陽ありて教誡(キョウカイ)とし文章と花厳
とふたをれとおく論をれく意をいかく華厳と

いひてあつまると花厳といひむけさうしひとをくる人
いたくもそれをもちこおの
の辨と見合をーー今や和漢の説人をして測ぬと
人意とをくるを儒仏と儒人の虚実といふを
訪ふに花厳のえ祖ろをれとやそれ十編
の森ぬるておほに杜陵と西行とをいえ人
もえ祖の差おをもるをーー
我皇功　柳子庵の遺稿をこ性圖として地圖相
の中にこ人の像ありて今のこ頻圖の類也
賛をえ作の筆あり今の五元井の許ふりて
稲妻にはとをぬるよ　芭蕉翁
それをもちてはふよ　俤ぬ竹

玩の用此何ぞ早かてん　東老坊
拙をもて此こと言をこそ
成し祖翁のお性と不生るあてん
ぬ處の人と看破をたして
のなてこれに温厚の二おとも
なくりて祖翁あてひ文てあてひ
飛諧し人の好悪てかくをやてこれ
とそうはて東老坊を師命とこれて雑談の
遺状となりて古今の誹諧のみと談
天下の古汎を坐断をもやて通し建立の業
はもれんもこれ共同の陰徳ともれとも
の陰徳ともれとも

一 杜明へよりの御しらせ委細ありがたく存じ奉り候 扨又此間は御出被下候節は不在にて失礼仕候 然ば御約束の御品々御持参被下候由 御厚志の段忝く存じ奉り候 尚又御出の節は御立寄被下候様奉願候 先は右御礼迄 早々頓首

元禄七年十月廿日

杉明へ

一 仰の如く此間は御出被下候節は不在にて失礼仕候 然ば御約束の御品々御持参被下候由 御厚志の段忝く存じ奉り候 尚又御出の節は御立寄被下候様奉願候 先は右御礼迄 早々頓首

元禄七年十月廿日

支考

杉風様

御報

遺物覚

一　二月日記　行基
一　発句帖　日本
一　俳本　まめ
一　新式書入
　　芭蕉翁へてをきて
　　学ぶべくおぼえて
　　まもりてをふし
一　文章を故
　　芭蕉翁へてをきて
　　くるの折をよみて
　　筆授し

一　お州栗の句
　　炭俵集、おの公羽と
　　有との連句
一　古今序伝五人一首、
　　和歌
　　そのまゝへてをき

元禄七年十月日

そをじ判

右之湖南の本霊寺ゟ
膳所の曲翠寺ゟ
の書翰 仏事ニ而
祖翁の月忌ニ
後の子おちや
余孫の朝
これ
任おのく
物始終

右之遺物ハ
ありて遠きを一生
ありて一年あり近きハ一月一日
農工商の示しなれて

何ぞと絶ちるてとく教ふる所同じてなくて
ホまるあへ我と学ぶ者を一一それをれ其
とて自己と比れとの教もをれに叶ひ其
の説まも固其名双立の益ーかえてのきる
紛説とまるつて我しまそとい言もて紛説と
くもむともそのふよくあるんこれらに
をねの事ととそうまる遠祢の教かと感を一一
人間遊所　挿まるに世説を例の如くして古風の
名人の好み所をとりくあるもそとくい論語と富而
可求也雖執鞭之士吾亦為之如不可求従
吾所好とそるも語を論語のくと見てそ好
の指詞ありとくそやくく言説の表裏とおもを
れその吾好と遊ふむ宮のあるに人間の私
とそるもそそれ一詞と害をれん紛説のそ
学あるを油ひまやくくそおも

傳四

神農黄帝　挿まるに山一對いなる猿田軸女の
ま指ありて姿体のはもをそる也神農を例の
おをも衣をとそて衣冠の外とあもる事ありて
黄帝を帯に衣冠とそて一一製画文の好論
ふそ作とをくまそ詩の説ありて図と畫文の作文
六義　六義を詩の説ありて国風の頌と
雅と朝廷の政といい頌を君王の徳とよ風雅と

經とあり賦比興と續とあるも大體の差ありなれ
ども其實は一つ物の體裁にて一つ文の體實なれ
ば也賦と眼おの〳〵其體を其まゝ述るを賦と
いひ興とは其物の姿情を其まゝ述るを興と
いひ比とは其物の姿情を其まゝ述るを比と
いひ其物其事を其まゝ述るを賦と云ふ
略文にて詩家にも屬するなり
沒滋味　按るに此句を全く取すの說ありて
上よりも此やうにそれを指てそれをいふ
もあるにやとおもへども然るに此語にも
又此語の說とてもあらざれば此句は須
[illegible]

ありて其句にも此語の根本を指
はゞそれを大小の差ありとも
るゐ程のそれとも差ありとも
投るを辭とてそうして茶碗の中に世界ありと
人とそうる言說の事ちりて今の味頭も垂まの
頁文におかしく人の再言（クリコト）あやうされそうん
たゞとゞ味の方味とそれ禪家の人のふるき
芙中刀　按るに此三ようは禪家の常法にて
学ぶ人とあつてよ拂揚ありて儒門にても時
い或ても和中の節ありて温中の處しいも
言中の說ありてそれ或ても言說
表裏とそうてそうして

才之段

白馬之徳　接之而智者
天下之達徳也（なり）といふ
のけめ〳〵そおもふらく
い般捷の事といひそ
頭挫の言とそうけれ
論語もし二の誤あり
必有（レ）勇（ヲ）勇者（ヲ）必（ズ）有（レ）仁（ヲ）
その能（ク）惑（ハ）ずといふい勇
〳〵勇なくてとかね
それとにそくそ智あ

賛とすることや君子に有りこの要望の儀甚だ即ち也温聽其言也厚矣也庶幾ここに俳道の一勧懲の二おのおのをして教化の詞の素養あらんことを

詩歌連俳

白馬文章訓ずるの連俳のいとあげて位階の論あり詩歌雅を詩ことわりやむことを連俳とことばしあることやはるの連歌の文ゐて俳諧も武もそれの実用の次第ゐわざおもの位としるを文武あるとおもいふなり後もおの実用ゐわざ一なりや俳諧を訓練と

天下の治見あんるふゐて武威と文事とをとゐるゐて成ることを論のねろる詩歌とありむへきゐ連俳をは妄の儒あり連俳ありしの武備ありしの武備ありしの武備

論語一部の結文を不知人と言へる事
凡雑の文章にて文末に言かの事をといふ〳〵
言にて言中の表裏とおもへる事と
名ふかくて我知言ともやうにいふ事
表裏にて尋ぬる意を言説のいきほひ
意と言にて意ありて表裏ありて
思はれる意に意ありて表裏ありて
それに言ふよりも意にて言ふ事
それ言説の表裏ありて尋ぬる
両用にて愚人にかしこき人
あれるも表裏のやうにて互に
ありて一字の陰陽にもある〳〵それ

らん〳〵云ふ事とそれとあると
ほいやうにて意と表とに
ハさんけれども矣聽者無察則通
視觀察もも人ともに伝ふるも
なりてもとちらにても伝ふるの察其所安而
たも表人の表裏にてみて
それと方便説にて人のみにて
己うみて人と伝ふるそれを
それのちがひの如乱ちがひ微生
て焉佞手とてそれよりもちがひ
かくまた非ニ敢焉一佞也疾固也と言説

こは天の自在と率土一誠に言語のたゆるにそう北辰回りやまず衆星これに向き奉るがごとく小人これに同き君子これに帰するもまた言語にもとづくにあらずや

道文章　白雪の人章に訓ずるところの文字の用としてみな人工に成るものにあらざるはなし雅俗ともに昇平の盛事にして海内ことごとく一人に帰するそれとれ天下一誠に言語の足らざるところを補うそれ孔子言誰知其志の言之無文行之不遠のたぐいこれ文の至るところ道のおよぶところ

にてこ道の文章にれて幾言となくかくのごとくなれども高とやくよて富言と助辞とくなくなくなれども高とやくよて富言と雅言もあれども一切ねと讃ぢくなくなく乱れ流れの字にて正字の言まもあらくて和玉の篇とにてなくなくと秘密の一ぢくて阿提羅毘尼婆提毘羅呼び唱えねをそ一唱えれば皆ことごとくこれ化仏とそもぬるもそれのそれにあるべくして仏の軍

て二道とをいふ一つにいふこと
の文とくく今の三用とをうなへたる書籍ハ
一万巻ありともよそてもの通てやうき
子和尚ハ三蔵の学者達ら皇儒ハ十
書十五書ものすとをあつめて人のよろこひ悦ハ
とおりてる文ともくさ話ありてたゝも何の用あるや侍て
ーと叫訓ともくさの文ともくさの用と達ら
ことの通称ありん

清稽、證人　梓さうた儒書も仰ぎるくまんへ
論もるくあれとも軟邸を何ねこかくきりおよ
何ねこかくとくへのふとを向とそちそをと
かむうこてそれもの用とんそけきれく或ら

張儀蘇秦

白馬教識訓之一世父初の大略をいふ

ちゝに儒術を連衡の事に改めさせんと言ひ張儀蘇秦と論説ス十哲の評論あり

人くくん掌我子吉旅とく辨口の説客しかれども分の地を出ずのそとく不實をいふ世代のうつり行くまゝ微そく數そくいれ乃の秤そくて夫よを陰きそのうつり仲そくと秤そくて結の二子とそくりきのよ時そくて言訣の用ちろ儒門よ

ちゝに儒術を連衡の事に改めさせんと言ひ張儀蘇秦と論説ス十哲の評論あり

人くくん掌我子吉旅とく辨口の説客しかれども分の地を出ずのそとく不實をいふ世代のうつり行くまゝ微そく數そくいれ乃の秤そくて夫よを陰きそのうつり仲そくと秤そくて結の二子とそくりきのよ時そくて言訣の用ちろ儒門よ

きる一さとやたてそ角の沖文くく史記の列伝と
齊田常欲代魯曰魯仗魯之国二三子何
至二吳中一子路子石請行孔子許之中略
請行孔子許之中略
破二吳強一而霸二齊晉一而威震越十年之中五国各有変
朝一吳越一天下之勢一在二魯晉一乱二齊
晉一其権在二大夫一今君欲伐魯以広二齊地一
危二国家一以従二其私一難以成功上有二強敵一下
制二大臣一君何以勝之不如伐二吳強一敬之使越霸二吾
之

説ナリ義言偽信ノ慎ヤ敬誠ノ作ル敬ト
ててて行くなんのは細ありけるとれまの家
訓ふ屈等の二子ありて所須ゐ他の秘訣と
あるらしらく国家の治乱をおふた風雷疾乱
の要とおおくく事人ことをはくもってたれ
とおそくしらのうち天道の常くあり
れてをて仁義のいとかりて倒りくまをも
とうい文学ふの国とやりくていい政ふうそうて言説
そもあついい言説ふくとあつてそうて言説
い文章にて論ずの連俗のいの事も能説い言説の
急用にて一一ふそれの仁義に沿道の次第ふて
ずてを徒りの治あれとも三皇のけるいさもも

虞舜をはじめて孫呉の末つかたまで帝皇の御上の
ご和の用のこと也。やまの世の治道をはじめ政事
文学など迂遠にして言法を今の実用にちかきを
もとゝして言ふたのみなれば戦国の中よりこなた
こゝろをもて時代を異にし通の用利ちがひ一概に
政事よりも文学もけっしてあしくいふにはあらず
とのく天の使令ひて智に面かとかねさるそ
あり。ただそこに男の事ゆゑ治道を手ぎはにおもふ
とをもて干戈をとりて治国の要のやうにおもふ
今や治道の五科と文学とはをしなべて政事の
文学の政事のこゝろうるはしき言語をもとりて
干戈の人と言をもちいる言語の人と利をもて

おろかに張三郎を智者にしてかしこき孫呉を干戈
はたらかされ我言ふ言語もおろかにきこえんやれよりも
たゞ正知ことをもて論語をも路ら雷集
とあつかふをもて必ず温故而懐旧(ママ)好謀而成(ママ)有記(ママ)
文をもて雅の言語といひ即ち言語の智謀とそう
きうとをもの儒者ありて古史のことをもとする
とて実我国ことふ貢之支藤者太史公所記(ママ)比旨
誹也(ママ)をもちゐ我好の注釈し五経の史記と書
令ともやそ人をもれてもの実我
ま貢をもちゐるこもとをもて字我のこ貢のこと常に
不根の持論をもてそこもの人和とをもへあちこれ
耳のみもちゐもこれ眼の見をもあれてしおくこと

ある人これを危行言孫の二字を以てよく
あらはしてそれを解くに山文通ずるに知通ずるに改通ずるなどいろいろ
なれど通ずるは悪敷記のくせとしてこれを取らずあやまりて
あり千載の下なほ言説の過ありて陳司敗の孔子を
そしり孔子の言説を木遣の根ざしなどと手きびしく論ずるも
と例くるを免れもちろん何とうまくいふとも文字
も言説もこれの字を知らずしてはやをれを違差の人もろもろ世界の人なれば

それと似ることそのふたつの人と古説ながら猿う鳥帽子とそり
合ぬ事くの机の上に実をひろげ一遍の事くとこしらへそれ
を評人もはやをけるもやうへ運船も一双貫之とそろへ一遍の事
史記これ内の弟子傳も論語一七十子の勤惣も寛政
子貢の辨論も張儀蘇秦等の説客も評林へさして
我庭の樹木のごとくに植ちんとて
いろ作の変化をあつめ
宋玉文章　白馬文章訓
宋玉の招魂のごときこれ
詞とりくにて祝をまく
ちふ二乃朝ふ若客雅も班孟堅ふ答賓戯も我邦の不通

といふ〳〵古今の賢ぢを品と說破をつ早言ハ淡笑の訊諫つゝて感字ハつゝ文言の法格を七段の評ゝ

文章感仰　按るに感仰と文言の全体の哀怨ありそゝ〳〵艶書のゝ体ちりも思ふ人のゝ北堂動くやうをそふゝ〳〵百枚かゝるゝ人のゝ北堂動くやうをとほす事ゝ宛ゝゝをきのれ事ゝ体ゝ人とゝゝゝ間のあやちりや言に艸ゝ用ゝてふをまる人〳〵ゝ言ゝ第九段の可怨ゝ言ゝ艸ゝ用ゝてふをまる人〳〵ゝ言ゝ哀怨ゝ田村ゝ君ゝ体ゝ感仰ゝ辨ゝ

我家家法　白隼、教誡別ゝ此二句の要論あり

我とをるはゝゝ人ゝとゝゝゝ儒佛諸子の說ゝうゝて我とをる時ゝゝゝあゝゝ俗諧のゝふのゝゝゝゝあゝ手を儒ゝゝ温むりゝゝのおゝゝあゝ一通あれゝものゝりひゝ通あれゝ佛ゝゝゝ端的ゝ悉ゝゝゝゝゝ端的の温和ゝゝゝ親昧の詞ゝゝゝゝ温和の端的ゝゝゝゝ儒佛ゝ言語の表裏ゝゝゝあつゝいとをんをゝゝゝ俗諧のゝゝゝゝ人のゝ作ゝゝゝゝゝ

ふさはしくして伊尹を任ずるよりして孔子を訕謗の言ありてそれにたとふるねたみ訕謗ふさはしくして伊尹を任ずるよりして孔子を訕謗の言ありてそれにたとふるねたみ訕謗

ふさはしくして伊尹を任ずるよりして孔子を訕謗の言ありてそれにたとふるねたみ訕謗

ふさはしくして伊尹を任ずるよりして孔子を訕謗の言ありてそれにたとふるねたみ訕謗

訓諫の鐸ところありおそれて尚おそる
秘しても秘しおよび秘しても秘しまた一まことにしけ言の宮訓
ちんとやしけちいさ諫の律と春秋摂伽の小分と
西落　むかし儒書仰雅の学者ありき
あり世知を敏捷の学者ありきそれて始あれも
終あり荘子に云る大早計の人あり愚痴拙
材勝の人ありて酒色とこのみて衣食
とそこつにして仰書こそ記性の人ありまるに
今て西落とも大悦の人ありまるに敏捷ともも
まもれず材勝ともやもすれて材勝る人の信んとなる
をしれてそこの西落とそこそこそこそこそこそこ
一世の有とも論語と二程の財といくとく

きてきるとも応聘七十国に而屈厚於公卿之門
其ノ不遇也如此やはくにもひの誇列ちも七雄
五霸の君とおてきてあるて大敵もものれよう
憂ひんのをうてそこそこそこそこそこそこ
せいの徴ちるとやてきてあるん可伸も可屈も
のち能とそ双六ちもうお貧ましきこ線も
天へも上よおんなをきれいて越王句践と追従
求山達い賢人の権妻あれいて越王句践と追従
ちもうへてそこそこそこそこそこそこ
と訓諫とめ一歩ちもうそこそこそこそこそこ
楚王へあるいて賞忠誅諛の和訣ち前鑒
の遊のやそこそこをれそこそこそこそこ

剛毅木訥の仁義ちかき處その
あつらひもんこと程みち孔膳まことに
朱子を般捷ことをえらばれもいつ一
五倫道 孝をもつて儒佛の
孝とをもつてをもつてをもつて
孝をもつてをもつて
又倫の名數をもつて
をもつて何をもつて倫をもつて
をもつて何このんとをもつて
と離をもつて大地の
もつてもつて
そのもつてもつて

もつてもつて私もつて
会議をもつて
もつてもつて五倫のもつて
もつてもつて
怒る苦もつてもつて
孝の怒をもつてもつて
次をもつて
とんの毫室をもつて
ちつとありて佛孔の顛倒もいつても

其人喜怒 孔をもつて世俗の事話をもつて
その接待のもつてもつて
或をもつてのもつてもつて

時あり或る人ありて物語に申されけるは、
そもそもわれあり或る酒宴のおりふしの
中鍋とそのつむおにおりあまさへこれ
るるとてそれをも例のあるじ人をとりて耳とまで
ゆむもり用をのそもそもの物
てそそそそ呼よるるとこれ話
俳諧の席そこもあんに高にもそこそこ
世代の事そんの軍中の交間そうて
俳諧
傳四
俳諧内證作法よ儒
い而よ対勝とはくそこれ話
禅代と俳諧そそ人の信

とあまされん儒門のこれ僕よ王帝の稽古の
の陰徳一有力の檀那も詞の表委とやまとも
作らんやそと能はざるものあり柿の核(さね)よ美心陰
とかくて云ひ云ひ国の実地よ植ゑる一粒(ひとつぶ)
一粒(ひとつぶ)くの信心ものとの乃
心施財施あれいも陰徳送財送施ありて
表むきの優劣もたおもあれて信財
とおくこ信言とのて信財とおくへれと
善のたくて天もくとそ
地物て貧ものと感を一一ものみを家業の
れよに世代のよと感を一一ものみを家業の
致思に手孫の雲末をとろろろ敬叔う車を

ありて徴(かす)夫二子之賊(ぬす)則丘之道治(おさ)将廢(すたれ)
ともこれくと無陰(かくす)手雨(ちから)とる善人の実説
ちりに渡手のの意の名利を我とまうあし美悪の
といふ人も意のの名利を人ぶをかくれよ名利
誌をくるもの今の信と味とよ走を
のの死墨うて財用ともりとまうもも
陰徳 白馬教誡訓 陰陽報を教のたねうて
例のこ面ゆくの一つれをを世代よてあなを
そくへいこ人ともまもをしてそうに百金の大
ますとをくもそくの一言のれといて
も金い塩へ於くるも同おあり一とをくると
陰陽とよ誠て陰のおいろるをとへいの

おろかにして、あしざまに、邪ゆる人の足をもて、
そしりそしるにあらむや。邪ゆる人、不報
の罪あり。これの担雖とも、夫生徳於子
とそ、いふなる。これの荒言にあらず。今これの書に
ふる処とそのたまへるをもて、これを証拠
とせむ。「子」顕「惟」徳とつゐ仰ぎて
五衆をそしり人の
ふるをなの
ふおろかにして、我のごとくに向ひ
例し一歩のそしりにあらむと、十人
いふ人のごとくに、平伐善不施

そを儒門に頼ふ徒なりと、神家の道に
い武帝とたくらふ徒なりて、一まに走言の我のごと
そを功徳の返るもそのあり